

特集
まえがき

日本近代化の陥穽と課題 —明治150年に寄せて

島崎 隆

今年(2018年)は明治維新から数えて、150年にあたる。こうして、1945年の敗戦を区切りとして、その前半が77年間、後半が73年間であり、平成の終わりまでで、ほぼ二分されるといえる。日本はこの後半の時期、戦争に直接には巻き込まれず、殺し殺される悲劇を免れ、ゆたかな経済発展をなしとげた。だが、戦争法(安保法制)の成立によって、いまや自衛隊がいつ海外で戦闘行為にはいってもおかしくない事態となった。明治維新以後の後半の平和が、いまや破られようとしている。

ところで、あまり目立たないかもしれないが、インターネットの記事を見ると、日本各地で明治維新と関連した行事がいくつも開催されている。たとえば、迎賓館赤坂離宮が「明治150年」を記念して、内閣官房との共催で、特別参観(一般公開)を企画している。政府自身が力を入れており、内閣官房「明治150年」関連政策推進室は、「明治150年をきっかけとして、明治以降の歩みを次世代に遺すことや、明治の精神に学び、日本の強みを再認識することは、大変重要なことです」と述べている。

従来(2012年)の安倍内閣の数々の政策と国会答弁などを観察していれば、彼らが日本の過去を誇り、さらにその線上で、復古主義と新自由主義を合体させて、改憲に邁進する姿勢であることは明らかであり、以上の記念行事もその方向性をもっているといえるだろう。彼ら(2012年)が為政者は、日本近代がもたらした「陥穽」や失敗に気が付かないし、見たくもないのだ。そ

こでは、過去の二つの世界戦争を中心に、日本が関与した国内への弾圧と国外への侵略と殺戮への深刻な反省などは見られない。アジア・太平洋戦争における日本の犠牲者の数は300万人以上といわれ、軍人・軍属230万人の6割は餓死者であるという調査もある。

過去に目を閉ざす者は、現在と将来にも盲目となるという表現は、しばしば引かれるものである。日本の過去は、多くの不幸な現実を作り出すことによって、近代化を何とか可能とした。日本の近代史は、さらに事実に基づいて、科学的に分析されなければならない。そうすることが明治維新から連続する現代日本の真相を深くえぐることにつながるだろう。過去の不幸なできごとを、だからといって水に流すのでは、いつまでも戦後は終わらないのである。

さて本特集は5つの論文からなる。北村論文や井本論文は、日本近代化の過程におけるいくつかの問題点を探る。村瀬論文は、江戸から明治への唯物論的な思想の継承関係を展開する。池田論文は捕虜の取り扱いの問題に日本近代化の独自の論点を洞察する。碓井論文は、近代化の現代的到達点として、ポピュリズムの問題を取り上げる。いずれも興味深いテーマを論ずる。

表紙の写真は、世界遺産となった群馬県の富岡製糸場である。日本の近代化のなかでの産業発展の象徴例といえるだろう。

(しまざき・たかし：客員編集委員，哲学)